

ひと日和

孤立①

“遺品整理屋”が見た死の現実

「体液というより、人間そのものが溶けてしまっているんです」

「絨毯にできた染みは、よく見ると人の形をしていました」

「まるで黒いタイルを貼ったように部屋全体がゴキブリに覆い尽くされていったのです」

世界唯一といってもいい遺品整理の専門会社「キーパーズ」(本社名古屋市)社長吉田太一さん(46)大阪府淀川区Ⅱが見た孤立死の現場は壮絶だ。4年前に出版した「遺品整理屋は見た！」(扶桑社刊)はこれまでマスコミなどで取り上げられてこなかった遺品整理と孤立死の現状を淡々とつづり、大反響を呼んだ。家族や友人らの誰にも看取られずに亡くなる孤立死は果たして本当に増えているのか。ことし「無縁社会」をテーマにキャンペーンを展開しているNHKの調べによると、無縁死は年間3万2千人を数えるといふ。

厚生労働省などの公式な数字はないが、創業以来8年間の間にキーパーズが扱った遺品整理に限って見ても、年1500件の依頼のうち孤立死と思われるのは半数近く。吉田さんは「急激にとまでは言えないが、孤立死が増えているのは確か」とみる。

大阪の高校を卒業後、日本料理店やホテル、クラブなどで調理師として勤め、その後、宅配便の会社に就職。これを機にキーパーズの前身となる吉田運送を立ち上げた。当初は引越ごとリサイクル業が中心だったが、ある女性から遺品整理を頼まれたのをきっかけにキーパーズを創業。「こんなにも遺族が喜んでくれるならもっと多くの人を喜ばしたい」と業態を遺品整理に特化した。殺人や自死の現場も数多く踏んだ



「遺品は故人の生きた証です」と数々の遺品に囲まれて話す吉田さん

Ⅱ東京・大田区

が、どんな凄惨(せいさん)な現場もいとわれないが身上。ただ、依頼の大半は遺族から。しかし、何十年の間、交流のなかった遠戚からが多く、電話一本で済ませたり、部屋には立ち寄りず、そのまま帰る人も少なくない。

孤立死で圧倒的に多いのが55歳から65歳の男性。「65歳以上の高齢者は公的な制度にある程度は守られ、死後何日も放置されるケースはまれ。問題は突然の解雇やリストラ、さらに離婚したこの年代の男性で、自ら社会との関係を断ち、引きこもった揚げ句、人知れず亡くなっている例が多い」といふ。

「女性は日ごろからチャネルを多く持っているが、男性は会社以外での訓練ができていない。仕事から切り離されると孤立化しかねない。しかも社会はコンビニや弁当にあふれ、一人暮らしでも困らない。」し

かし、女性の社会進出や非婚化が今後さらに進めば「将来は女性の間でも孤立死が増えるのでは」と危惧する。では解決策はあるのか。「まず孤立死は決して人ごとではないと認識すること。他者と関係を遮断している状態は不健全であり、放置しているとコミュニケーション能力そのものが退化してしまうと知るべきだ」と説く。社会の負の側面を目に焼き付けてきた吉田さんの指摘だけに重い。

◆ 今夏、高齢者の所在不明が全国各地で発覚した。「孤立」が一段と進んでいる現実を胸を痛めた読者も多いのではないのか。県内でも孤立化は進んでいるのか。この問題にかかわる人たちに聞いた。(編集委員・掛井史朗が担当します)